



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 44 回 日本語教育方法研究会
学習院大学
2015 年 3 月 28 日 (土)

3 月 28 日に学習院大学で第 44 回研究会を開催いたします。今回の発表件数は 56 件となりました。今回の研究会も、熱く貴重な意見交換の場となることが期待されます。是非とも多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

会長 衣川隆生

TABLE 1 第 44 回研究会開催について

日 時 :	2015 年 3 月 28 日 (土)
会 場 :	学習院大学西 2 号館 5 階
開催委員 :	金田智子 (学習院大学) 小河原義朗 (事務局: 北海道大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:15	受付 (発表者・一般) ポスター貼付	1:40	総会
10:00	開会の挨拶	2:00	口頭発表開始
10:05	会の進め方の説明	3:10	ポスターセッション開始
10:10	口頭発表開始	4:40	ポスターセッション終了
11:10	ポスターセッション開始	5:00	講評
12:40	ポスターセッション終了 昼食・休憩 午後のポスター貼付		次回開催委員挨拶 閉会の挨拶 参加者全員で片付け
		6:00	懇親会

【参加方法】

事前申し込みは必要ありません。直接会場においでください。非会員の方でも、会場で手続きをして参加することができます。皆様、お誘い合わせの上、ご参加ください。なお、会場での現金の授受はできるだけ避けたいと思いますので、会員の方、会員になるご予約の方は、事前の会費納入 (p.15 参照) にご協力ください。

新規入会 : 3,000 円 (年会費)

当日のみ参加 : 2,000 円

【プログラム】

【午前の部】

●口頭発表（5件）

1. 大学教育における「日本事情」科目の位置づけに関する一考察—ディベートを用いた論理的思考育成の試み—

塩谷由美子・小野塚若菜（東京富士大学）

大学教育における「日本事情」科目の内容については、文部省が昭和 37 年に通達した省令の不明瞭さを現在もまだ引きずったままの状況にあり、専門知識を噛み砕いただけの一方的な講義が展開されていることが多い。筆者らは「日本事情」科目を、学習者自らが「考える」能動的な学習形態に転換させていく必要性があるのではないかと考えた。そこで本研究では、学習者が能動的かつ協働して学習活動を行うことを目指して行った、ディベートを取り入れた「日本事情」科目の5年間の実践をまとめ、その中でも特に指導の課題として浮かび上がった「論理的思考」に関する気づきを促すことを目的に、ビデオ教材を使った指導の試みを報告する。

2. 理系大学の複言語環境を活用した短期留学プログラムにおける協働

本郷智子・上原真知子（東京農工大学）

シンガポールからの理系学部生を対象とした短期留学プログラムについて報告する。プログラムの目的は、工学専攻で日本語も履修している留学生が日本の工学研究室における研究を洞察し、同時に研究室文化についても学習することである。専門分野の研究室を訪問し、主として英語で研究内容について学んだことを最終的に日本語にまとめ発表することが課題とされている。一連の活動の結果、日本人学生との複言語による協働作業や、日本語によるコミュニケーション活動を通して、専門分野についての知見を得ると同時に日本語運用力も身につけていくプロセスが観察された。

3. 学外でのインタビュー活動における日本語学習者の意識—日本語学習者が感じる不安と成長—

寺嶋弘道・戸坂弥寿美・井上佳子（立命館アジア太平洋大学）・高尾まり子（西南学院大学）

様々な日本語教育機関では、学外で日本語母語話者と接触する活動が取り入れられている。学習者は教室内よりも教室外での日本語運用により不安を感じる傾向にあるが、このような活動における学習者の不安は明らかにされていないのが実態である。そこで、本研究では立命館アジア太平洋大学の中級コースの学習者を対象にし、学外でのインタビュー活動における不安を調査した。その結果、学習者のインタビュー前の不安、実施後もう一度行くと想定した場合の不安、実施前後の不安の変化、またインタビュー活動を通しての学習者の成長が明らかになった。

4. 自律的な読みを支える読解活動の試み—「読書ダイアリー」と「POP」作りの実践から—

尾関史（国際交流基金日本語国際センター）

自律的な読みの力を身につけていくためには、教室で与えられた素材を読みこなしていく能力の習得だけでなく、教室の外でも、自律的に読みの活動を進めていく能力が必要となる。特に、日本語に触れる機会の少ない海外においては、授業外での学習者の読解活動をどのように支え、広げていくのが課題となるであろう。本実践では、海外若手日本語教師研修プログラムにおける読解授業の中で行った「読書ダイアリー」と「POP」作りの活動について分析を行った。考察の結果、これらの活動を通して、読書への動機が高まったり、読書のジャンルを広げたりする効果があったことがわかった。また、これらの活動を帰国後、自分の授業で行ってみたいとの声も多く聞かれた。

5. ICT化による授業の試み—『できる日本語初中級』を使って

山森理恵・外崎淑子（東海大学）

発表者らは、初級後半クラスで ICT 化による授業を試みた。行動目標達成をめざす『できる日本語初中級』を使用教材とし、教科書のねらいをより効果的に実現させるために教科書の内容を全てパワーポイント化、副教材は pdf 化して授業を行った。本発表では、どのような形でパワーポイント教材を作成したか、また、実際にどのように授業を行ったかを報告する。また、14 年度春学期・秋学期の 2 回、ICT 化による授業を行った際、学習者

に意識調査を実施している。その結果も報告し、ICT化による利点・改善すべき点を検討する。

●ポスター発表（上記5件を含む28件）

6. 中国人学部留学生の卒業論文作成に関するケーススタディーインタビューの質的分析を通して—
服部明子（三重大学）

本稿では、学部の卒業論文指導について検討するため、卒業論文を提出した直後の中国人学部留学生に、卒業論文作成および日本語への困難点、論文作成に役立ったことなどに関するインタビューを実施した。質的分析の結果、留学生の論文スキーマは、形成途中にあったが、論文作成において論理的記述の重要性を認識し、モニタリングや評価を行っており、メタ認知方略が学習プロセスを進めるために寄与していることが示唆された。

7. 文難易度の調整を支援するシステム「かぶとエディタ」

北村達也（甲南大学）・住田真一（甲南大学学生）・孝橋一希（甲南大学研究生）

本研究では非日本語母語話者にとってわかりやすい文章を書くためのエディタを紹介する。このシステムは、かぶとエディタといい、利用者が用意した単語リストに基づき文章中の単語をレベルごとに色分け表示する。単語リストは利用者が作成することができるため、独自の判定基準で単語をレベル分けすることができる。単語レベルの判定は、エディタ下部にある「レベル判定」ボタンをクリックすることによって実行される。かぶとエディタはJavaを用いてプログラムされているため、OSによらず実行することができる。

8. 学習動機づけプロセス・モデルに基づいた日本語短期研修

池田富見子（久留米大学）

久留米大学では、15年以上に渡り、夏期の日本語短期研修を実施している。2014年度は学習動機づけプロセス・モデルを導入し、研修参加者の日本語、久留米大学、久留米市への興味を持続させることを試みた。実施前アンケートによる明確な目標設定と、ポートフォリオによると各ステップごとの振り返りにより、研修を通して、目標・成果を意識付けすることができた。事後のアンケート結果によると、研修生のほとんど全員が研修に触発され、日本語学習を継続したいと回答し、短期研修からさらに久留米大学への長期の留学を希望していることが判明した。

9. 日本語非母語話者教師の漢字学習に関する意識—非漢字系若手教師への質問紙調査より—

濱川祐紀代（国際交流基金日本語国際センター）

日本語非母語話者教師（NNT）60名を対象に漢字学習に関する意識調査を行った。日本語学習者を対象にした漢字研究には漢字学習の困難点を挙げる先行研究が多数見られるが、本調査の結果、①NNTは漢字学習に対してプラスイメージ78.1%、マイナスイメージ21.9%と概ね好意的なイメージをもっていること、②漢字の難しさゆえに漢字学習をネガティブに捉えるのではなく、「努力すれば漢字学習は成功し、漢字がわかれば役に立つことが多い」「パソコンでタイプできても漢字の勉強は必要だ」などのように漢字学習を前向きに捉えていることがわかった。今後は、漢字力や漢字学習ストラテジーとの関係性を明らかにしたい。

10. 文化誌作成プロジェクトを通じた地域創生コンソーシアムの形成

平田未季（秋田大学）

地（知）の拠点整備事業の一環として、秋田大学基礎教養科目「日本社会入門 II」において、過疎化が進む秋田県潟上市豊川地区で廃校になった小学校跡地を拠点とし、留学生が豊川地区の「人の物語」を伝えるタウン誌を作成するというプロジェクトワークを行った。プロジェクトを通して、留学生と地区住民が交流を深めるのみならず、豊川地区の自治体・各種団体、秋田大学に所属する国際交流に興味を持つ日本人学生、そしてタウン誌を通じた地域活性化を目指す東京の編集者・デザイナーという三者と留学生による地域創生コンソーシアムを形成することができた。これにより、かつて小学校が同地区で果たしていた「世代を超えた交流」が実現した。

11. 日本語教員養成のための反転授業の実践と学習者評価—「言語と教育」から「社会・文化・地域」まで—

篠崎大司（別府大学）

本研究は、日本語教員養成向けeラーニングコンテンツを活用して行った反転授業の実践報告である篠崎

(2014a) (2014b) の続報である。篠崎(2014b)の結果および考察を踏まえ、本研究では以下2点を変更して、授業を実践した。1. 「アクティブ1」(講義内容に関するチェック問題)を授業中の実施から予習に移動した。2. 到達度テスト(制限時間 50 分)の問題数を 40 問から 100 問に増やした。受講生による授業評価の結果、80%の受講生が本授業に肯定的であった。

12. 次が読みたくなる初級読解教材の開発

上田美紀・渡辺民江(中部大学)

読解教材には、文型・語彙等の総合学習の素材として作られたものや、読解技能の学習を目的として様々なスタイルの文章を提供するもの等がある。また、学習者が実際に遭遇する読む場面を想定した、ニーズに基づく教材等も作られている。このような教材は、興味を持って先を想像しながら読むことは少ないと考えられる。本研究では、『読み』の楽しさに着目した読解教材の開発を目指す。構成は、文法項目は初級文法提出順を意識し、無理なく内容把握が可能な形とする。内容は、教材全体をドラマ仕立てとし、ストーリー性を持たせ、『次が読みたくなる』気持ちを喚起することを目指す。本発表では、試用後のアンケート調査から、改善点を探る。

13. テーマとタスクを融合させた中級教科書の開発—開発のプロセスと教科書の概要について—

工藤嘉名子・大津友美・菅長理恵・中井陽子(東京外国語大学)

東京外国語大学留学生日本語教育センターでは、日本で学ぶ留学生のための中級教科書『出会い』を開発中である。開発は、①基礎研究に基づくテーマおよびタスクの選定→②テーマに関する取材・情報収集→③サンプル教材の作成と試行→④教科書試行版の作成と試行というプロセスで進められた。開発中の教科書は、日本社会・文化に関する6つのテーマと、それらのテーマと必然的な関係を持つ4つのタスク(発表とインタビュー)から成る。テーマの学習とタスクを有機的に結びつけることにより、①日本社会・文化に関する知識の獲得、②自分の考えを日本語で伝え合う力の獲得、③身近な他者と積極的に関わっていく力の獲得を目指している。

14. 日本語教育の視点から見る中国語の「的」と日本語の「の」—「N1のN2の…のN」の形を中心に—

毛莉(白百合女子大学大学院生)

日本語を専攻している大学生を対象とし、「の」の習得状況についてアンケート調査を行った。その中から「田中は人民大学の日本語先生。→田中さんは人民大学の日本語先生です。」のような誤用がでていた。下線の部分でわかるように、学生が「日本語先生」をそのまま「日本語先生」と訳し、中国語の原文のスタイルと合わせていることがわかった。しかし、なぜ、中国人の日本語学習者は「の」をつけるべきところで「の」を抜くのであろうか。本発表では実際の中日相互翻訳版の小説からいくつか例文を取り上げて考察し、「的」と「の」はどのように関係しているのかを明らかにしたい。

15. 日本語の学習を諦めた学習者の動機減退要因のプロセス—中国における日本語を専攻とする学習者の一事例—

許晴(北海道大学大学院生)

本研究は、中国における日本語を専攻とする日本語の学習を諦めた学習者を対象に、動機減退要因プロセス、特に、学習目標や試験に関する減退要因を質的に明らかにすることを目的とする。半構造化インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)で分析した結果、学習目標に関しては、<日本語能力を伸ばすという目標がない>という概念、試験に関しては、<試験の成績が悪い><勉強せずにぎりぎり合格できる><試験への姑息な考え方>という三つの概念が抽出された。

16. 自己質問作成を取り入れた読解授業の実践報告—生成された自己質問の分析—

二口和紀子(名古屋大学大学院生)

本研究では、自己質問作成の活動を取り入れた読解授業を通して、日本語学習者がどのように文章を理解しているのかを調査した。中級日本語学習者を対象に、授業内で、テキストに関する質問、また、その解答を学習者自身に作成させた。さらに、その作成した質問を他の学習者に聞かせて、解答を考えさせた。生成された自己質問を分析すると、各学習者は、整理型自己質問、あるいは、吟味型自己質問の一方の種類に偏る傾向が見られた。よって、自己質問作成の活動を通じて、学習者の読みに変化は生じなかったと言える。

17. あいさつの対人関係による使用制限—日本語教育の視点から—

丁尚虎（東北大学大学院生）

あいさつの使用には制限があり、この制限は対者との関係次第である。本発表では、あいさつの対人関係による使用制限の定義と特徴を検討し、日本語教育への示唆を提示する。まず、上下・親疎（ウチソト）の視点から「対人関係」を「上親」「同親」「下親」「上疎」「同疎」「下疎」という 6 種類に分ける。次に、日本語の「こんにちは」と「さようなら」を例としてこの対人関係による使用制限とは何かを説明する。さらに、中国語の例を取り上げ、これらのあいさつ表現の使用制限の言語による違いを明らかにする。最後に、日本語学習者によるあいさつの誤用例から日本語教育の現場でこの「対人関係による使用制限」を明示する重要性を指摘する。

18. 日本語学習者による連体修飾表現の習得状況に関する一考察—KY コーパスを対象に—

李凌潔（東京工業大学大学院生）

本稿の目的は日本語教育文法の一例として連体修飾表現を取り上げ、日本語学習者がどのように連体修飾表現を使っているか、また、どのように連体修飾を習得しているかを明らかにすることである。本稿では KY コーパスを対象に調査を行った。まず、日本語学習者の発話に現れた連体修飾表現を含む例を抽出、それを品詞別に分類し、四つのカテゴリを設けた。そして、分散分析と多重比較を用い、レベル別に連体修飾表現の習得状況について分析した。レベル別の各カテゴリの習得状況の分析、考察を基に、連体修飾表現の習得状況を明らかにした。

19. 中国での日本語会話授業における学習者同士の会話活動を重視する授業づくり—補助的視聴覚教材の使用を手がかりに—

汪夢情（香川大学大学院生）

本研究は、中国高等教育機関での日本語専攻学習者を対象に、彼らの会話能力と深く関わる日本語会話授業に注目したものである。中国での日本語会話授業における教師と学習者のインタラクションを IRF モデルでコード化して分析した。その結果、学習者による主体的な発話が少なく、教師は主に補助的視聴覚教材となる板書を行うことによって、学習者とのインタラクションを取ることが分かった。中国日本語会話授業は教師・教科書主導型授業から脱却するため、学習者同士の会話活動を重視し、適切な補助的視聴覚教材の使用から学習者同士の会話活動を活性化させることが重要だと考える。

20. 評価の項目及びその基準を考える協働活動に教師の声が与える影響—中上級日本語学習者を対象とした口頭発表技能クラスにおいて—

末松大貴（名古屋大学大学院生）・衣川隆生（名古屋大学）

本研究では、口頭発表技能育成を目的としたコースにおいて、中上級日本語学習者が相互評価を行う際の評価の項目及びその基準を考える協働活動を対象として、教師の介入や助言（以下「教師の声」とする）がその活動にどのような影響を与えるのかを分析した。その結果、教師の声が協働学習を促進するものとして機能する場合と、協働学習を停滞させてしまうものになる場合があることが分かった。その分析及び結果に基づき、学習者の協働学習を促進するためには教師はどのような声をかけるべきなのかを考察する。

21. 異文化能力の育成をめざした遠隔日本語教育

岩崎浩与司（早稲田大学）

本稿は、ICT（Information communication technology）を活用した遠隔日本語交流会についての報告である。本交流会では、参加者のコミュニケーション能力の向上とともに、文化的背景の異なる他者と共生するための異文化能力の育成を目指した。2014 年秋学期に行われた交流会には、中国、韓国、スウェーデンの 3 か国の日本語学習者と、日本語母語話者が参加した。参加者へのアンケート調査から、コミュニケーション能力と自他文化への知識の向上、異文化への態度の変化等がわかった。

22. CLD 児の言語育成支援ポータルサイト「ハーモニカ」の開発

鈴木庸子（国際基督教大学）

「ハーモニカ」は CLD 児（Culturally、Linguistically Diverse children）の健全な言語の育成を目指し

て開発しているポータルサイトである。CLD 児は文化的、言語的に多様な環境で成長する子どもや生徒を指し、開発の目的は母語の重要性についての啓蒙および育成支援である。サイトの構成は子どもと生徒、保護者、先生、ボランティアの支援者、研究者、行政関係者の6カテゴリーを設け、子どもと生徒のカテゴリーには学習教材や多言語の歌やオンラインブック、保護者向けに子育て情報、先生、支援者、研究者、行政関係者には実用的なものから研究成果まで様々な情報にリンクをしている。レイアウト、カテゴリーの妥当性、情報量と情報選択の妥当性、更新と開発目的の達成度の検証を課題としている。

23. 漢字圏学習者のための、漢語にフォーカスした「聴解タスク」の開発

藤田朋世・前原かおる・渡部みなほ・野口真早季・増田真理子（東京大学）

漢語（漢字2字熟語）はしばしば音声コミュニケーション場面でも用いられるものであり、これを正しく聞き取って理解できることも肝要である。しかし、音声からの意味理解に弱点を持つ漢字圏学習者にとって、「聞こえた音」と「文脈」だけを頼りに一語に特定することは容易ではない。そこで、発表者らは、音声として与えられた漢語の意味理解を、「漢字音の音交替規則（例：「失敗」における1字目の促音化や2字目のh/p交替）」の知識を利用しながら実現していく「聴解タスク」を開発した。その結果、音に対応する正しい漢語を特定するには、①音自体の聴取、②音からひらがなへの変換、③ひらがなから漢字への変換——の各段階の正確さを高める学習が必要であることが明らかになった。

24. おそ下がりに対応したプロソディグラフ自動出力システムの開発

松崎寛（筑波大学）・高橋恵利子（広島大学）

本研究者らは、音声認識技術を活用したプロソディグラフ（以下PG）自動出力システムを開発中である（JLEM 会誌 Vol. 19-No. 1）。ピッチ曲線を音節単位で区切り、そのままPG化すると、物理的な高さと言語的な高さの非対応（＝おそ下がり）が学習者の理解を妨げる問題が生じる。しかし辞書情報に依拠してPGを補正する方法では、学習者の誤り発音をPG化することができない。そこで、「ピッチ情報を1拍分前倒し」「末尾拍はピッチ推移から高さを予測し表示する」方法で新システムを構築した。新旧システムを学習者に試用し、比較した結果、前倒しでは改善が見られたが、末尾拍は、文末音調との関係で課題が残された。

25. 初級学習者の格助詞「で」と「に」の捉え方

宮林賀奈子（ロンドン大学東洋アフリカ研究学院大学院生）

本調査は初級学習者の場所の格助詞「で」と「に」の捉え方をインタビューを通し調査した。結果、先行調査の岩崎（2001）の結果と異なり、本調査では、正確に各格助詞を理解していた3名を除き、約半数の学習者が理解は様々で必ずしも正確な理解ではなかったが、両助詞が場所を示す格助詞であることを理解していた。この結果から、中間言語構築の初段階で意味と形態を一对一に保つために一方の助詞だけを場所の格助詞と捉えるとは限らないと考えられる。また6名中に「で」は正確に捉えている学習者がいたことに加え、「で」だけを場所の格助詞と認識していた学習者もあり、格助詞の導入順序が理解形成に影響した可能性も考えられる。

26. 日本語で「多読」を楽しむ—自分の「読み」を表現する授業—

片山智子（東京大学）

初級から中級前半レベルの留学生を対象に「多読授業」をおこなった。授業の主な目的は①易しい本を多く読むことで日本語の自然な読みのリズムを体得すること、②様々な活動を通して自分が構築した「状況モデル」を表現し、読みの理解を深める力を身につけること、の2点である。使用した本は、昔話や文学作品をリライトした多読用教材で、受講生9名は15週間（実際の授業は13回）で、初級レベル（1冊500字程度）から中級レベル（1冊10,000字程度）まで平均17冊を読んだ。授業では、教員によるブックトーク、好きな本を選んで読む個別読み、好きな本の紹介とクラスメートへの読み聞かせ、登場人物の日記や筆者への手紙を書くといった活動を行った。

27. 介護場面に基づくシャドーイング教材開発に向けた一考察

田辺淳子（岐阜大学）

日本では介護福祉士の人手不足が深刻であり、EPAの介護福祉士候補者を始めとする、介護に携わる非日本語

母語話者の存在が欠かせない。介護の現場で必要とされる日本語の習得や国家試験合格を目指し、介護に特化した様々な専門日本語教材が開発されている。しかし、日本語学習の初期段階から使える教材や聴解教材は市販教材にはない。介護施設での調査を基に短い会話からなるシャドーイング教材を開発し、日本語学習の早い時期から活用することで、1) 発音・イントネーション、2) 聴解力、3) 復唱力、4) 発話速度、5) 語彙、6) 言語処理能力、7) 専門用語や表現、8) 自然な会話に必要な機能・文法などの習得・向上に寄与できると考える。

28. 日本語学習者のグループ発表における評価の観点の意識化に関する検討

佐藤礼子（東京工業大学）

大学学部1年生の日本語クラスで、「社会に役立つ技術」をテーマに2～3人のグループで発表した。クラス全体で作成した評価項目を用いて発表を相互に評価した。発表後、項目別の相互評価点のグラフと教師のコメントを合わせてフィードバック（FB）をし、その後分析シートを用いて発表をグループで振り返った。グループで振り返ることで、より具体的に発表を分析できることがわかった。また、FBと振り返りの内容との関係を検討したところ、相互評価で点数が低い項目についての振り返りが多い傾向がみられた。一方、教師FBは、評価項目によっては振り返りに影響を与えにくいこと（項目例、「内容のおもしろさ」「構成」）が示された。

【午後の部】

●口頭発表（5件）

29. 学生の専門領域や興味関心と体験への意味づけ—短期日本語プログラムに参加した日本人ボランティアの場合—

武田知子（恵泉女学園大学）

体験学習の重要性が指摘されているが、体験を学びに繋げるには、振り返りが不可欠である。本研究は、短期日本語プログラムに参加した日本人大学生ボランティアの学科や興味関心と、体験学習後の振り返りがどのように関連しているのかを探るものである。学生の毎回の感想と事前事後のアンケートを分析した結果、振り返りで言及する話題や視点が、所属学科や元々の興味と関連している傾向が見られた。これからの結果から、多様な側面から日本語教育を理解してもらうには、経験を個人で振り返るだけではなく、学部や興味が異なる日本人学生同士でそれぞれの振り返りを共有できる環境を整える必要があることがわかった。

30. 医療・介護のための山形方言検索の工夫

後藤典子（東北文教大学短期大学部）

地方の医療・介護の現場では、方言が使用されることが多い。特に痛みや不快な心情を表すときに、患者や介護施設利用者は方言を使用することが多いが、外国人が理解するのは難しい。聞き取りにくく、不明な語彙を明確に把握することもむずかしい方言を検索するための方法を模索した。入力候補は書き取りアンケートのデータに基づいた。また、複数の方言要素がまとまり、明確に不理解語彙を把握することも難しいと予想されるようなものについては、比較的聞き取りやすいキーワードから、不明な意味の理解につながるような工夫を行った。

31. 社会人基礎力育成プロジェクトに留学生が参加する影響

佐々木良造（秋田大学）

本発表は、参加者の多様性が社会人基礎力の育成に寄与しているかどうかを検討することを目的とする。日本人学生と留学生が参加した社会人基礎力育成の企画に、マネージャーとして参加した日本人学生4名および企画担当教員1名を対象として企画終了時にインタビュー調査を行った。インタビューから、マネージャーの経験を通して、留学生との距離の縮め方がわからず参加者の緊張をとく方法もわからないという状況を主体的に解決し、実際に働くときにも相通じることへの気づきを得ていることがわかった。こうした経験は、企業が学生に身につけておいてほしい能力としてあげられる「主体性」や「粘り強さ」を培うことに役立ったと考えられる。

32. 文章の構造を図式化する課題に見られる中・上級日本語学習者の問題点

高橋亜紀子（宮城教育大学）

中上級の日本語学習者を対象とした読解の授業において、文章を読み、その文章の構造を図に示したあとで、文章の内容を再生するという活動を行った。その結果、上級の学習者は文章中の重要な情報とそれ以外の情報と

を選別し、重要な情報が上位になる階層構造を示すことができた。一方、中上級の学習者の中には、重要な情報が選択できない、文章の階層構造が示せないなどの問題点が見られた。これらの問題点は、再生にも反映されていた。この活動では、学習者がどのように理解していたかが可視化できるため、教師はもちろん、学習者自身、学習者間による問題点の検討にも役立つことが分かった。

33. 非漢字圏中級学習者はどのような漢字学習を経てきたか—その多様性に着目して—

前原かおる・菊池富美子・増田真理子（東京大学）

中級レベルの非漢字圏学習者たちは、現在のレベルに達するまでの間、どのように漢字を学習してきたのだろうか。発表者らは、中級～中上級の非漢字圏学習者8名を対象にインタビューを行い、漢字に関するこれまでの学習歴、及び好みの学習方法について調査している。本発表では、彼らから得たコメントについて「字形の学習方法の好み」に焦点を当てて考察した。その結果、学習者が漢字学習において重視する観点の違いは、学習レベルの推移によって変化してきたこと、また、現時点では各自の学習目的の異なりを反映していること、が窺えた。今回は、これらにつき、各人の具体的な学習方法と合わせて報告する。

●ポスター発表（上記5件を含む28件）

34. 文章中の語彙の初出課を判定するシステム

中野光（甲南大学学生）・北村達也（甲南大学）

本研究では、日本語教師が授業の進捗に合わせて例文、単語、句を選択する作業を支援するwebシステムを開発した。このシステムはスリーエーネットワークの「みんなの日本語」に準拠しており、入力文章中の単語や連語の初出課を判定する。利用者がwebブラウザ上のテキストボックスに文章を入力し、任意の課を選択すると、当該の課における既習語と未習語が色分け表示される。本システムを利用することによって、「みんなの日本語」を利用した授業における教材作成に要する時間と手間を大幅に削減できる。

35. 共同研究を円滑に遂行する上での課題

中川健司（横浜国立大学）・角南北斗（フリーランス）・齊藤真美（カナダアルバータ州教育省）・布尾勝一郎（佐賀大学）・橋本洋輔（国際教養大学）

共同研究の形をとる研究は多い。過去10回のJLEMでの発表を見ると、平均で約4割が共同研究である。共同研究のメリットとして、個人による研究ではまかなえない専門性や多様な視点、ネットワーク等を補うことができることが挙げられる反面、課題としては、どうやって共同研究者を見つけるか、研究上のコミュニケーションの困難さ、ビリーフ、研究観の違いからくる齟齬等が挙げられる。本発表では、共同研究者の①所属先の異同②専門分野の異同の2つの軸で区切り、それぞれの場合のメリット、課題について考察する。発表では、共同研究を円滑に遂行するためにどのようなことに留意すべきなのかを参加者と議論できればと考えている。

36. アラビア語圏学習者の物理および数学の授業における一試案

山田裕紀・青木由香利・斉木ゆかり（東海大学）

アラビア語圏学習者の物理と数学の授業において三つの困難に遭遇した。一つ目の困難は、日本語の読解力や聴解の力の低さ、二つ目の困難は、物理と数学の基礎学力の極端な低さ、三つ目の困難は、授業への参加度の低さである。これらを克服するために、彼らの特性や学習背景を生かすことで、効果的な方法を見出すことができた。具体的には、ビデオ教材の利用やディスカッションの導入、参加型形式の問題演習などである。その他にも本ポスター発表では我々の実践の中で気づいたことや工夫をいくつか紹介する。

37. 中上級の読解指導—精読から速読へ—

澁谷きみ子（同志社大学）

日本語の読解授業では、語彙から文節、文、段落といったボトムアップの読みが主流であり、「読み方の準備訓練」に留まっている傾向がある。本研究では、「読み方の準備訓練」から「読む訓練」の実践として、精読の後、同じトピックを扱った新聞記事で速読する活動を行った。精読では、語彙、表現を確認した後、段落ごとに内容が理解できているかを確認した。次に同じトピックを扱った新聞記事を黙読で速読した後、音読で漢字語彙の読み方や文節の区切りをチェックしながら読み進めた。学生へのアンケート結果から、「役に立った」との回

答を得ることができたが、同時に効果的な語彙指導の必要性が示唆された。

38. 文法指導のバリエーションを意識した中・上級文法授業の実践—外国人日本語教師研修における試みの整理—

木田真理・山本実佳（国際交流基金日本語国際センター）

国際交流基金日本語国際センターで実施している外国人日本語教師研修における中・上級向け文法授業の内容は、教授対象者が「日本語学習者」でもあり「日本語教師」でもあることから、教授能力の向上も目的となっている。文法授業担当者は、文法知識を与える際、その説明方法や練習方法にバリエーションを持たせ、外国人日本語教師が、様々な文法指導を体験することによって、自国での文法の教え方へのヒントとなるように授業を行っている。本発表では、2014 年度の海外日本語教師長期研修での文法授業の実践について、授業記録や研修参加者アンケートなどを参考に、文法指導のバリエーションの観点から整理をする。

39. 日本在住韓国人留学生の 3.11 東日本大震災後の対日イメージ

金元正（九州大学大学院生）

本研究では、日本在住の韓国人留学生（以下、KFS）が持っている 3.11 東日本大震災（以下、3.11）後の対日イメージを考察することで、韓国人が日本に留学することと 3.11 との関連性を明らかにし、韓国から日本へ留学することに悩みを持っている韓国人学習者に、日本留学を検討する際の材料として提供することを目的とする。20～30 代の KFS 5 名（東京 2 名、福岡 3 名）を対象として半構造化インタビュー調査を行った結果、東京の KFS では、3.11 を経験した後、日本や日本人に対して信頼性が極めて高くなり、留学生として日本で生活する力や自分の心も強くなっていた。一方、福岡の KFS では、放射能の影響の心配以外には特に対日イメージの変化は見られなかった。

40. 「LTD 話し合い学習法」にもとづく授業実践—上級日本語学習者を対象に—

森山仁美（久留米大学）

本研究では、「LTD（Learning Through Discussion）話し合い学習法」（以下、LTD）を日本語教育の読解授業に適用し、活動性を高めるのに有効であるかどうかを検討した。LTD とは協同学習の一技法であるため、仲間同士の対等な話し合いを通して参加者一人一人の学習と教材の理解を深めることを目的としている。今回、森山（2014）の授業実践を踏まえ、上級学習者を対象に LTD を適用した結果、話し合いを活性化させ、話題に対して学習者一人一人が考えを深めることができた。また、日本文化への理解や批判的思考を促す様子も見られた。

41. 日本語可能文における意志性—中国語の可能文と対照しながら—

呉志寧（白百合女子大学大学院生）

日本語可能文の成立には「意志性」が必要であるということが指摘されている。しかし、この「意志性」は実現可能文において必ずしも必須ではないことが林（2007）によって指摘されており、また、可能文における「意志性」の有無も実際には、すべてが同様であるわけではい。それでは、この「意志性」は日本語の可能文において、どのようなあり方があるのだろうか。本稿では、このような現代日本語可能文の成立に関わる「意志性」を対象にして、その有無を明らかにしたい。さらに、それに対応する中国語可能文との関連性も考えたい。

42. 中国人日本語学習者の小集団討論における接続表現

孫莉（西安交通大学）

本稿では、佐久間（2002）の「文脈展開機能」の分類に基づき、中国人日本語学習者の小集団討論に見られる接続表現の特徴を、日本語母語話者との比較を通し、明らかにしようとした。集計の結果、学習者は母語話者より頻繁に接続表現を使用し、特に自己発話内容の論理関係を明示するのに接続表現を多用することが分かった。一方、接続表現を用いて、他の会話参加者の話を促すことが少なく、他の会話参加者の発話への関心を母語話者ほど具体的に示さない特徴も見られた。また、学習者が接続表現で、会話の進行をコントロールする能力も不足していることが明らかになった。会話教育で、談話における接続表現使用の指導は欠かせないものと思われる。

43. ノダの上位概念「解釈」に関する調査及び教授法—ノダの教え方に向けて—

小出寿彦（京都外国語大学大学院生）

本発表では名嶋（2007）を理論的枠組みとし、ノダが提示する「解釈」に関する調査を行った。まず、留学生 33 名を対象にノカ文（～んですか）と非ノカ文（～ますか）の使用場面に関するテストを実施し、併せてノカ文と非ノカ文に関するメタ認知と学習者が受けた教授法に関するアンケートを行った。次に、絵教材と練習問題を使用してノカ文と非ノカ文の教授を行った。この時、ノカ文の教授における「解釈の妥当性を問う」の「解釈」は「視覚による解釈」とした。また、必要に応じてフォローアップ調査を行った。本発表では事前・事後・後日テスト結果、および、「解釈」の概念を教える前、教えた後、1 か月半後で、メタ認知の推移の調査結果を報告し、その内容を分析する。

44. ベトナム人日本語学習者における発音に対する意識化への試みーフィードバックの事例、無声化した「す」に着目してー

井上正子（首都大学東京大学院生）

昨今、急増しているベトナム人日本語学習者の発音の問題は、アクセント、イントネーション、長短音の区別の誤りや不自然さなど多岐にわたるが、本研究で着目したのは、母音が無声化した「す」の発音が困難な点である。本研究は、日本語の丁寧さを表現するスタイルマーカー「です」「ます」の「す」の発音が困難な学習者の発音に対して意識化を図る縦断的研究である。教室内で簡単な指摘と発音指導を繰り返すことにより、指導開始 2 ヶ月半あたりから発音の問題点に対する意識化へ、さらに 10 ヶ月後には文末のみならず語中の無声化した「す」に対する意識化へと導くことができた。本論文は、その指導の試みに関する実践報告である。

45. 優れた中国人日本語専攻学習者における学習動機に関する縦断的研究

王俊（東北大学大学院生）

本研究は学習過程において、優れた中国人日本語専攻学習者における学習動機とそれに影響を与える要因を明らかにするために、記述式質問紙調査、インタビュー、学習日記、授業観察という 4 つの方法を組み合わせ、学習者 2 名を対象に 3 年間の縦断的調査を行った。その結果、日本語の学習過程において、終始学習者を支配し、最も多く出てくる動機は義務的動機であることが分かった。学習者 A は自己効力感と義務的動機、外発的動機に支えられ、学習動機が好成績、奨学金、使命感により影響されていた。一方で、学習者 B は、義務的動機と内発的動機から、次第に義務的動機へと変換しており、学習内容が面白い場合は内発的動機が引き出されていた。

46. 作文教育における媒体に応じた体裁の指導の必要性

金庭久美子（立教大学）

近年読み手を意識した作文教育が行われているが、その作文が書かれる媒体によっても書き方に留意する必要があるように思われる。本研究では YNU 書き言葉コーパスにおける 12 タスク（計 720 作文）を用い、メール文、手紙、新聞の投書、雑誌記事などの媒体において学習者の作文が期待される体裁となっているかどうかを調査した。その結果、作文の能力が高いグループにも体裁に違和感を覚えるものがあり、低いグループではメール文の開始部や終結部の挨拶の不備、新聞の投書らしくないもの、雑誌記事の冒頭部や終結部における読者に向けた文の欠落などが見られた。このことから作文教育において媒体に応じた体裁の指導の必要性が明らかになった。

47. 中国人大学生の日本語教育への課外活動の有効性維持について

王尤（中国吉林華橋外国語大学）

中国の大学における日本語教育の問題は様々にある。例えば、一人っ子の親の過剰干渉や入試システムによって、学習者は意に反して日本語を勉強することが多い。また、日本語教育に重要な日本文化教育に割り当てられる授業時間数が少ないなど。筆者は、2013 年 4 月に中国吉林華橋外国語大学で課外活動を実行し、同年 10 月に意見調査し、2014 年 1 月に成績調査をした。その結果、日本語の勉強に役立つための日本語関連課外活動の有効性を証明した（2014 年発表）。このような活動は、活動開始後 2 年が経過し、参加者の取り組み状況はどうなっているかを知るため、再度追加調査を行うことにした。その結果からこれまでの結論をさらに深めていけばと思われる。

48. 日本語母語話者は初級日本語学習者に防災知識をどのように説明するか—接触経験の差によるコミュニケーション方略の違いに焦点を当てて—

安藤郁美（名古屋大学大学院生）

接触場面において日本語母語話者が日本語非母語話者に情報を伝えようとするとき、接触経験によってコミュニケーション方略に違いがあるという指摘は多い。そこで、接触経験に差がある日本語母語話者が初級日本語学習者に対して防災知識について説明を行うロールプレイを行い、コミュニケーション方略の違いを、「言語的調整」、「会話的調整」の枠組みを用いて分析した。その結果、接触経験が少ない日本語母語話者は「言語的調整」は行うが「会話的調整」は行えず、接触経験が多い日本語母語話者は、「言語的調整」に加えて相手の理解を確認するなどの「会話的調整」を行いながら説明できることが示唆された。

49. 日本語の語彙習得におけるタスクの効果の検証

櫻井留美（宇都宮大学大学院修了生）

本研究では、意味重視の活動であるタスクを形式重視の活動である疑似会話と比較し、日本語の語彙習得に与える効果について検証した。どちらの活動においても対象語彙の語義は写真により視覚的に導入した。調査の結果、受容的な語彙使用においてはタスクと疑似会話を与える効果は同等であるが、産出的な語彙使用においてはタスクの方が効果が大きいことが明らかになった。また、タスク遂行時の発話内容も分析し、語彙習得に重要な役割を果たす意味交渉が全ての学習者によって行われていることが観察された。本研究により、視覚的に語義を導入する場合でもタスクが日本語の語彙習得において有用であることが示唆された。

50. 自己モニターを活用した音声教育における独自の基準の観点

河野俊之（横浜国立大学）

現在、筆者は自己モニターを活用した音声教育のeラーニングの開発を行っている。そこでは、独自の基準作りが重要になるが、それができない学習者もいる。さらに、他の学習者の独自の基準を参考に独自の基準を作ることができる学習者もいるが、そうでない学習者もいる。そのような学習者には、他の学習者の独自の基準をそのまま示すのではなく、独自の基準を作る際の観点を示すことによって、独自の基準を作ることができるのではないかと考えた。そこで、まず、今までに収集した独自の基準を整理し、いくつかの観点到整理した。本発表では、その過程と整理した観点到について述べる。

51. can-do 行動目標に基づいたタスク型初級教材の開発と実践—タスク遂行のプロセスに焦点をあてて

藤森弘子・前田真紀（東京外国語大学）

本学では、アカデミックジャパニーズ能力獲得を主に目指した「全学日本語プログラム」を留学生向けに開講しており、2011 年から熟達度・技能別に示した「全学日本語 can-do リスト」開発に着手し、それに基づいた教材開発も同時に行っている。開発中の初級教材（2014 改訂試用版）は、学習者が学んだ日本語で何ができるのかがタスクとして明示されている。本発表では、タスクを遂行するプロセス、すなわち一連の授業実践の例をタスクの種類別に示し、タスクによるシラバス設計の有用性について考察する。

52. 他者の課題遂行を評価する活動が自身のメタ認知コントロールに与える影響—中上級日本語学習者を対象とした口頭発表技能育成クラスにおいて—

片上摩紀（名古屋大学大学院生）・衣川隆生（名古屋大学）

本研究では、他者の口頭発表を分析的な視点でモニターし評価する活動は、自分自身の目標設定と評価にどのように影響を与えるかを分析した。分析は、口頭発表技能育成のクラスにおいて中上級日本語学習者が相互に口頭発表を評価する活動、及びその結果に基づいて各々目標設定を行い口頭発表、相互評価を繰り返すという活動（における対話）を対象とした。分析の結果、他者を評価する活動において、自身が意識化していない内容を具体的に評価した場合、この内容がその後の自身の目標設定や評価内容にも影響を与えることがわかった。つまり、他者を評価する活動は、評価する側のモニタリング基準確立にも有効であることが示唆された。

53. 漢字音教材開発—音符の活用—

黒沢晶子（山形大学）

漢字の構成要素のうち音符は、意符に比べると、これまであまり教材に採り上げられてこなかった。だが、「適」から「滴」の字音「テキ」を導き出すように、音符（「滴」の旁の部分）を漢字音の類推に役立てるのは、母語話者・非母語話者を問わず用いている基本的なストラテジーである。本発表では、上級学習者が同形要素から音符を見つけ、同じ音符を持つ字の字音を既知の字から類推するタスクを行うことで、音符の活用を意識化する過程を報告する。中国語を母語とする学習者にとっては、中国語の標準語では見分けのつかない「滴・敵」と「低・底」（いずれも di）が日本字音では、「テキ」に「テイ」に分かれることを確認する機会ともなる。

54. 中国語母語話者の日本語学習観-質的分析によるケース・スタディの試み-

小林由子（北海道大学）

「学習観」は「何をもって学習とするか」というメタ認知的知識の一種であり、学習の在り方に大きく関わる。本発表の目的は、中国で日本語を学び日本の日本語学校に在籍する中国語を母語とする日本語学習者の日本語学習観の一端を明らかにすることである。方法は、日本での日本語学習について半構造化インタビューを行い質的な分析を行うというものである。その結果、対象者は、自己の日本語習得状況についてそれほどモニターしておらず、試験の点数により進捗を判断していることや、練習量により学習したかどうかを判断する「練習量志向」が強いことが示唆された。

55. 「食」をテーマとした日本語授業の実践報告

中山由佳（早稲田大学）

本発表は、某大学の初級後半以上の学習者を対象とした日本語選択科目「食べ物で学ぶ日本語」授業実践を紹介する。「食」は学習者にとって生活に必要な要素であり、また、関心の高いテーマでもある。本授業では、名産品、レストラン、レシピ、季節や行事の食、思い出の食べ物、文学や映画に登場した食べ物、食事のマナーといったトピックを扱い、グループ会話、読解、ビデオ視聴（聴解）、口頭発表、作文などの活動を行った。授業最終日に行ったアンケートから、学習者はこの授業を通し、語彙力増強し、日本および世界の文化を学んだと感じており、日常生活に役立つと考えていることがわかった。

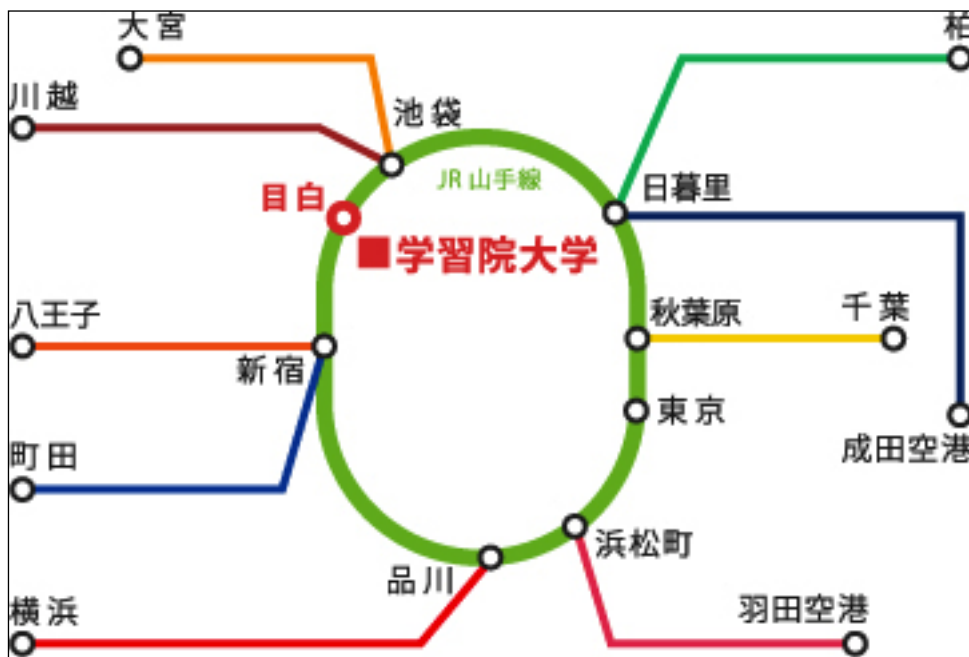
56. ロールプレイ後の気づきについて—実際のパフォーマンスとの対照から—

斉藤紀子（東京農工大学）

本研究は学習者のコミュニケーション後の気づきとそのパフォーマンスにどう反映されているかを調査したものである。まず7つのロールプレイを行った後、面接を行い、自身のパフォーマンスについて気づいたことを語ってもらった。面接とロールプレイの会話は文字化し、気づきとして語られたことと実際のパフォーマンスを照らしあわせた。その結果スピーチスタイルや文の中での陳述から依頼文への移行などの問題には気づきが得られることが多いこと、単語の間違いや接続詞には余り意識が持たれていないこと、また情報の量や提出順の適切性については不安を感じていても実際には問題ではないこともあり、その使用評価ともに迷いがあることが観察された。

【会場案内】

学習院大学 〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1 <http://www.gakushuin.ac.jp/univ/>



【学習院大学への交通アクセス】

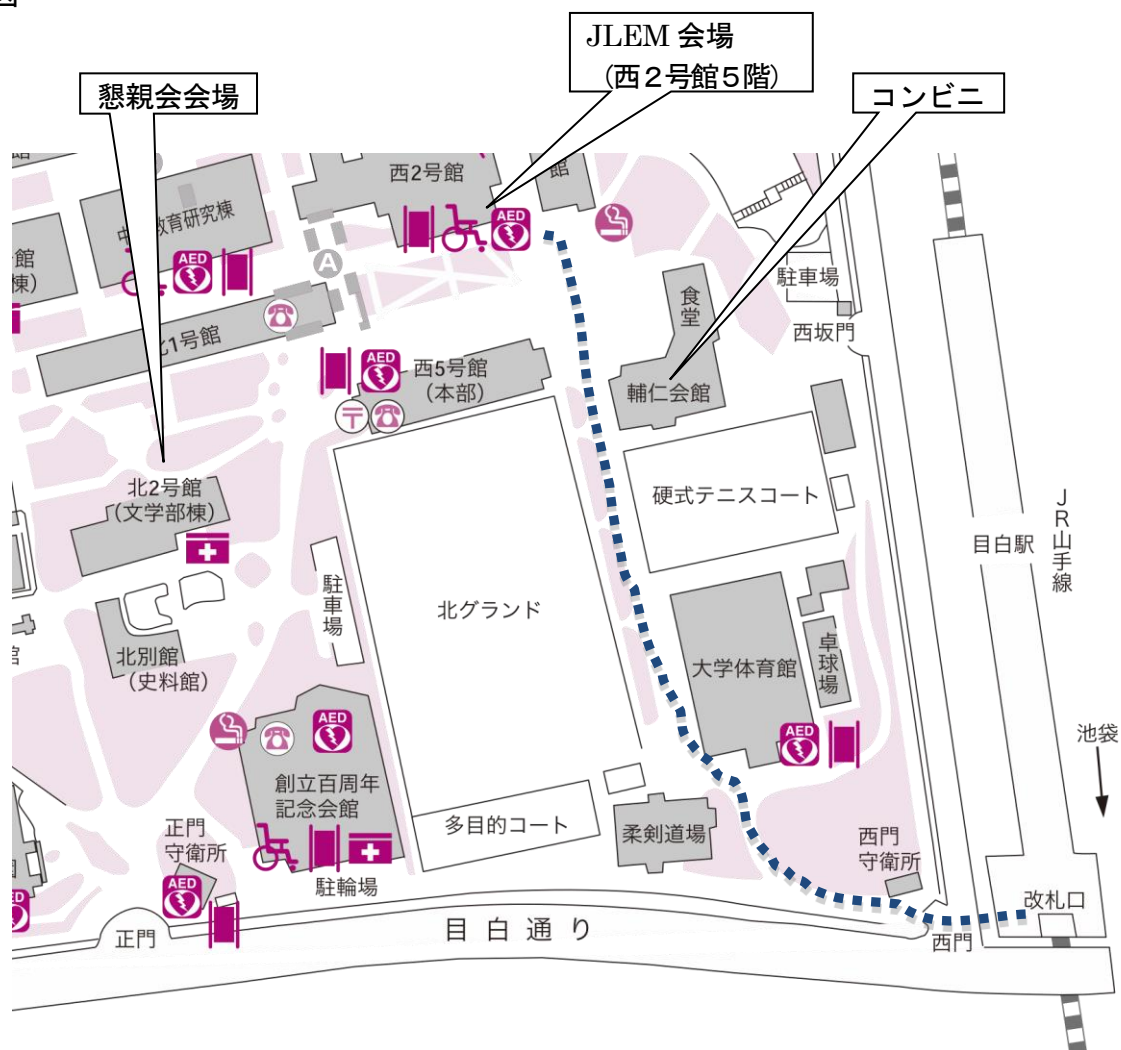
JR 山手線「目白」駅下車、徒歩 30 秒

JR 東京駅より JR 山手線「目白」駅まで約 25 分

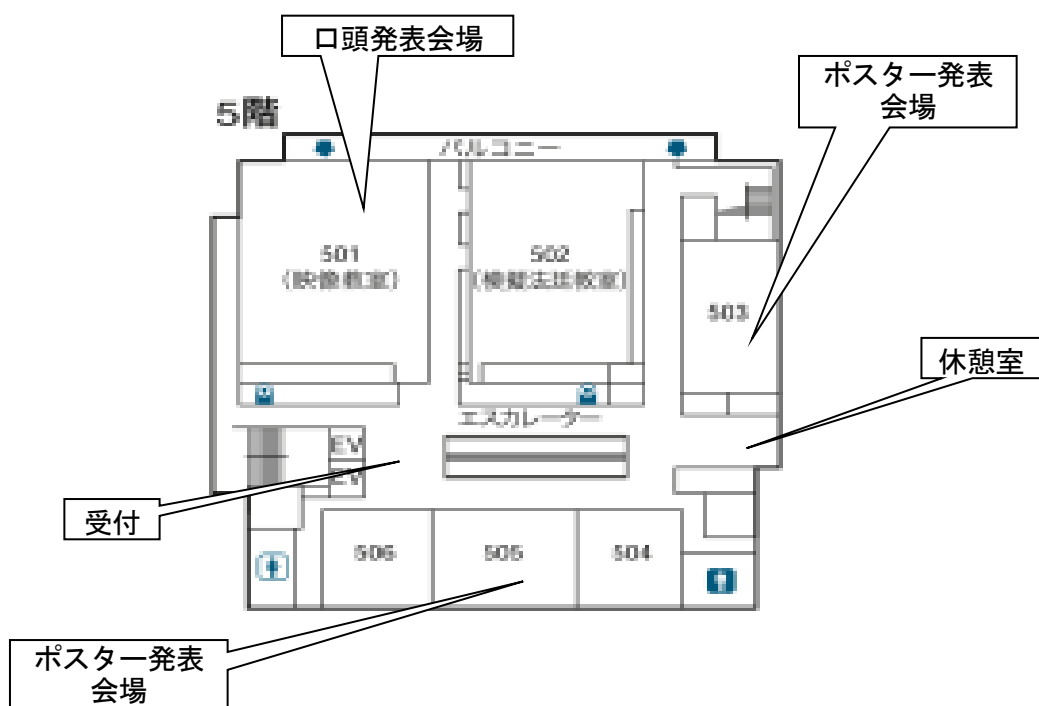
羽田空港から JR 山手線「目白」駅まで約 50 分



○構内地図

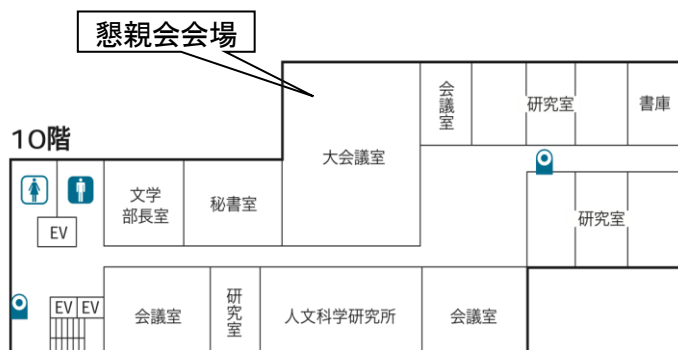


○会場内案内図



【懇親会】

閉会の挨拶、全員での後片付けの後、学習院大学北2号館 10 階大会議室にて懇親会を行います。ぜひご参加ください。会費は 2000 円です。



【会費納入のお願い】

JLEM では1月から12月までを会計年度としております。2014 年度会費（3,000 円）未納の方は早急に納入いただきますようお願いいたします。2年分未納の場合は会員資格を失います。会費は、会場の混雑を避けるためにも、可能な限り、事前に郵便局にて下記の口座に「電信振込」でお振込みください。郵便局に口座を持っている場合、振り込み手数料は無料になります。ご不明な点がおありでしたら、jlem-ml#tiu.ac.jp（#は@です）まで e-mail にてお問い合わせください。

【振込先】（1）郵便局の「電信振込」で払い込む場合

記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

（2）銀行から振り込む場合

銀行名：ゆうちょ銀行

店名：〇一八 店（ゼロイチハチ店） 金融機関コード：9900 店番：018

預金種目：普通（または貯蓄） ※預金種目は「普通」「貯蓄」のいずれでも振込可能

口座番号：6907651

口座名：日本語教育方法研究会